

5 図書を紹介する方法

読み聞かせ

(1) 読み聞かせとは

「読み聞かせ」とは、絵本や物語を声に出して読んであげることです。本の世界の楽しさを伝え、児童生徒と本を結びつける、最も簡単で効果的な方法が「読み聞かせ」です。

読み聞かせでは、聞き手に活字を読む負担がないため、まだ字を読むことに慣れていない低学年の子どもでも、本の世界を存分に楽しむことができます。読み聞かせは、いくつになっても楽しいものです。小学生だけでなく、中・高校生にも恐れずに取り組んでみましょう。

(2) 本を選ぶ

読み聞かせは、どう読むかより、何を読むかが大切です。よい本を選び、読み聞かせを行うようにしましょう。

よい本は、技術がなくても、それだけで人々を惹きつける力を持っています。また長年読み継がれてきた本は、世代を越えて人々に選ばれてきただけの魅力があります。

よい本が分からない場合は、発行年が古いロングセラーの本をまず選び、読んでみましょう。

また、信頼できる機関が発行しているブックリストを参考にするのもよいでしょう。県立図書館でも推薦図書リストを配布したり、読み聞かせ文庫を設置したりしています。

さらに、集団への絵本の読み聞かせでは、以下の点にも留意して選びましょう。

◆集団の読み聞かせに向く絵本の条件

- 大きさが一程度以上ある
- 絵がどの子からもよく見える
- 絵が見開きに一場面
- 一場面あたりの文の量が少ない

また、学習した事柄に関連する本や、季節や行事に合わせた本を選ぶのもよいでしょう。

(3) 絵本の読み聞かせの仕方

① 安定した持ち方

- ・聞き手がイスに座っているときは、読み手は立ちます。
- ・聞き手が床に座っているときは、イスに座って読みます。
- ・体の横に本を持ってきます。(本が右開きの場合は、体の右側に)
- ・どの子からも絵本が見えるようにし、本が不安定に揺れたりしないように、手を添えて支えます。



たりしないように、手を添えて支えます。本を持つ手の親指の付け根で本の背を支え、他の指で本のとじのところをしっかりと押さえます。(手で、絵本の絵を隠してしまわないように注意しましょう。)

②「開きぐせ」をつける

- ・新しい本など、「開きぐせ」が十分についていない本は、ページがよく開かず、せつかくの絵が見えにくくなってしまいます。

<開きぐせのつけ方>

机の上で本を開き、ページの始まり側からと終わり側からを交互に開いて、すべてのページを手の腹でしっかり押さえます。

③ 下読みをする (練習)

- ・必ず本番と同じように本を持って、声に出して読みます。
- ・あらかじめ、どのくらい時間がかかるか計っておきます。

④ めくり方

- ・手をできるだけ絵本の上か下にかけるようにして、腕でページを隠さないようにしてめくります。
- ・前もってページの端に手をかけておき、スムーズにめくれるよう準備しておきます。
- ・話の流れによって、めくり方の速度をかえるとよいでしょう。

☆勢いがある場面は、さっとめくる。

☆文を読み終わったらすぐめくるのではなく、お話の流れを考えて、聞き手に絵を見る時間を与えます。字が少ない場面や字がない場面こそ、間を取ってめくり、じっくりと絵を見せます。

☆ページをめくった瞬間には文は読まず、一呼吸おいてから読みます。
(聞き手はその瞬間、絵に集中します。)

(4) 絵本の読み聞かせの手順

絵本の世界をまるごと子どもに手渡すために、表紙から見返し、裏表紙まで、絵本の世界をじっくりと紹介して読みます。

表紙と裏表紙の絵がつながっている場合は、最後に一枚の絵となるように本を開いて紹介するとよいでしょう。

◆読む手順

表紙(タイトル、著者を読む)→見返し→タイトルページ(タイトルを読む)→本文(本文を読む)→裏見返し→裏表紙→表紙(再度タイトルを読む)

(5) 読み方

聞き手の心の中にお話の世界が残るような読み方を心掛けます。「うまく読もう」と思うのではなく、素直に、飾り気なく、ゆっくりと心を込めて読みます。

《参考文献》

『えほんのせかい こどものせかい』松岡享子著 日本エディタースクール出版部 1987
『読み聞かせわくわくハンドブック～家庭から学校まで』代田知子著 一声社 2001



ブックトーク

(1) ブックトークとは

ブックトークとは、児童生徒と本をつなぐ技法の一つで、あるテーマに関連づけて複数の本を選び、それらの本をつないで、順番に紹介することを言います。

クラスなどの集団を対象として行うことが一般的ですが、書架の前で個人に対して本を紹介することもブックトークに含まれます。

(2) ブックトークの効果と魅力

テーマに合わせて本を紹介することで、聞き手はいろいろな種類の本と出会い、複数の選択肢の中から自分に合った本を選ぶことができます。

紹介された本はもちろんのこと、読書全体に対する興味を引き起こすような、楽しいブックトークにしたいものです。

紹介されなければ知らなかった本やジャンルに出会えることも、ブックトークの魅力です。内容はよいのに、装丁が地味だったり、分厚いために敬遠されがちだったりする本など、手に取られにくい本を紹介する機会になります。

(3) ブックトークの準備と実施

ブックトークは、聞き手の読みたい気持ちを喚起し、本全体に親しみや興味をもたせることを目指しています。

そのためには、紹介する本の選択とテーマにそった展開の仕方、そして紹介する本の魅力を引き出すトーク（シナリオ）が重要です。

① テーマを決める

語り手は、まず、聞き手の興味を引くようなテーマを決めます。

- ・ 学習していることから
- ・ 季節の中から
- ・ タイムリーなものから
- ・ 考えを深めていきたいことから
- ・ 楽しい思考を広げる言葉から

☆テーマが決まらない場合は、逆に、勧めたい本を核としてテーマを探り、関連する他の本を選ぶという方法もあります。

② 本の選択

テーマに合った本をできるだけ多く読み、本を選びます。

- ・まずは核となる本を選び、関連しそうな本を選びます。その中からさらに本を精選します。
- ・紹介する本の冊数は、テーマ・学年・時間などにより異なりますが、30分以内のブックトークで5～8冊程度が目安です。

<注意点>

- ・聞き手の年齢を考慮して本を選びます。同じテーマでも、学年が違えば選ぶ本も異なってきます。また同じ学年でも読書能力は異なるので、手軽に読める本（絵本など）からチャレンジする本（長編読み物）まで難易度に幅を持たせて選びます。小学校高学年や中高校生でも絵本は有効です。
- ・児童生徒の興味・関心の対象はさまざまです。物語とノンフィクション、科学読み物など、ジャンルに幅を持たせます。
- ・よい本と児童生徒を出会わせることが目的です。全体の構成を優先して、勧める必要がない本を入れないようにします。
- ・ブックトークの後で児童生徒が紹介された本を借りることができるように、学校図書館にある本を選びます。

③ トーク（シナリオ）を考える

◆導入

聞き手をすばやく引き付けるために、効果的な導入法を工夫します。本に出てくるものの実物や人形などの小物、写真などの小道具や、歌、手遊び、クイズなどを用いることもあります。

◆つなぎ

本から本へ移るとき、何をキーワードにして次の本を紹介するかという「つなぎ」の言葉が重要となります。どんな言葉でつなぐかを考えながら、紹介する本の順番を決めます。

◆細案を考える

○展開の流れを再確認

○本の何を紹介するか

（あらすじ、登場人物、事件、冒頭、感想など）

○どのページを紹介するか

※低学年ほど、丸ごと読んで紹介する本を多く入れます。

朗読や挿絵を紹介したり、読み聞かせたりする部分を多く入れます。

○時間配分

時間をかける本、さらっと流す本などメリハリを持たせます。

ブックトークのあとに、自由に児童生徒が本を手取る時間（5～10分）を設定できるよう、時間配分をしましょう。

④ 練習

- ・全体の構成が決まったら、原稿を書き、声に出して覚えます。
- ・児童生徒とのやりとりを念頭に置き、耳で聞いて分かりやすい言葉を使うよう推敲していきます。

⑤ 実施上の注意

- ・本のタイトルを、必ず声にしてはっきり聞き手に伝える。
- ・紹介の間、その本を聞き手に見えるように持つておく。（紹介するまでは、本は見えないように伏せておきます。）
- ・紹介する本のページがスムーズに開けるよう、付箋を付ける。
- ・児童生徒がブックトークの後、本に立ち返ることができるように、紹介した本のリストを作成して、最後に配布するとよい。

Y小学校1・2・3年生

 **秋の夜、耳をすませば…** 

1. 『なく虫ずかん』
大野正男/著、松岡達英/画、佐藤聡明/音、藤原栄大/文字 福音館書店
なっているのは、なんの虫かな？
くらやみ、はやしのなか、川のきしべ、いえのまわり…
みみをすませば、きこえてくるよ。

2. 『鳴く虫観察事典』
小田英智/構成・文、松山史郎/写真 偕成社
音の出るひみつは、はねにかくされているよ。
なきごえでつたえられるメッセージや、ようちゆう から
だっぴして、せいしゆうになるまでのようす、それに、
なく虫たちの かいかた もわかるよ。

3. 『なくむし - 育てて、しらべる日本の生きものずかん 11』
大谷順/監修 集英社
スズムシの体を見てみよう。耳はどこにあるかな？
鼻がないのに、においがわかるのはなぜだろう？
なく虫たちについての、いろんなことがわかるよ。

4. 『すずむし きりぎりす』
山崎柄根/監修、七尾純/構成・文 くもん出版
そらがくらくになると、むたちは お月さまのために、
おんがくかいを ひらきます。
でも、とつぜん 木のうえから おおきな音がして みんな
びっくり。あおまつむしくんは、みんなにきらわれて、
なかにいれてもらえません。

5. 『虫たちのふしぎ』
新開孝/著 福音館書店
アオマツムシは どんなずがたをしているんだろう？
中国からわたってきたってほんとうかな？

6. 『コオロギ』
高家博成/監修、大木邦彦/文、海野和男/写真 ポプラ社
虫たちの、なくぼしよや 体のいろのちがいをくらべよう。

7. 『むしたちの おんがくかい』
得田之久/文、久住卓也/絵 童心社
まちには、おんがくかいの ひらける しずかな ぼしよが
なかなかありません。あきらめかけた そのとき…。

紹介した本のリスト（宇佐市民図書館）

(4) ブックトークの参考実例集

最近発行された本で、実例が掲載されている本を紹介します。

- ・『キラキラ応援ブックトーク ～子どもに本をすすめる 33 のシナリオ』
キラキラ読書クラブ／著 2009
☆集団、個人向けに想定した実践的な 33 のシナリオを収録
- ・『今日からはじめるブックトーク ～小学校での学年別実践集』
徐奈美／著 少年写真新聞社 2010
☆低学年、中学年、高学年別の小学校向け 21 の実践例を収録
- ・『だれでもできるブックトーク 2 (中学・高校生編)』
村上淳子／著 国土社 2010
☆中学・高校生向けのシナリオあり

(5) もっと気軽にブックトークを

本格的なブックトークを組み立てることは大変ですが、児童生徒に勧めたい本を1、2冊紹介することは比較的容易にできます。

先生が教えてくれた1冊は、きっと児童生徒の本への興味につながることでしょう。読み聞かせの後や、行事や授業など、児童生徒が関心を持ちやすい場面で、ぜひ本の紹介を試みましょう。そして学校図書館の中でも、本選びに迷っている児童生徒がいたら、おすすめの本を紹介してみましょう。

また、委員会活動などで、児童生徒に、ブックトークにチャレンジしてもらおうのもよいでしょう。

《参考文献》

『ブックトーク ～理論と実践』

全国SLAブックトーク委員会編 全国学校図書館協議会 1990

『ブックトーク再考』 学校図書館問題研究会「ブックトークの本」編集委員会編

教育史料出版会 2003

『学校DEブックトーク』 笹倉剛編著 北大路書房 2007

『どこでもブックトーク』 北畑博子著 連合出版 1998

『ブックトークの意義とその効果的方法』 松岡享子著 (『こどもとしょかん』1997年73号)

お話（ストーリーテリング）

（１）お話とは

お話（ストーリーテリング）とは、話し手が、話をすっかり自分のものにして（覚えて）、本を見ないで聞き手に語って聞かせることを言います。お話は、声によって伝達される文学です。

（２）お話が育てるもの

お話を聞くことは、子どもにとって、何より楽しい体験です。耳で聞いて自分の頭の中にイメージを作り出すものなので、想像力や考える力を育て、耳で聞く読書から読む読書へと育つきっかけにもなります。

話し手は聞き手の目を見て語り、一緒にお話の世界を楽しむことにより、聞き手と話し手、あるいは聞き手同士の間関係をはぐくみます。

（３）お話を語る

① お話を選ぶ

お話を語るためには、よいお話を選ぶことが最も重要です。まずはたくさんのお話を聞き、読み、自分の語りたいお話を探します。

その中から、自分の声質等に合うお話を選びます。

そして、聞き手に合うお話を選びます。子どもがそのお話を楽しめるか、年齢に合っているかなどを考えます。

◆語るのに向く話の条件

語るためのお話は、単純で太い筋が一本通ったものが向いています。

○単純であること ○はっきりとした筋 ○単刀直入な始まり

○出来事がつながっていく筋の展開 ○満足のいく解決

☆昔話や民話はお話の宝庫です。

☆(4)の②「お話の本」よりお話を選ぶとよいでしょう。

② お話をおぼえる

言葉が自然に口をついて出てくるように、しっかりお話を自分のものにします。自分の中でどういうイメージを描くかが大切です。

◆お話の基本的な覚え方

- 1 何度も声に出して読む
- 2 お話の骨格をつかむ

- 3 言葉からお話のイメージを描く（お話を絵にする）
 - 4 全体を通して語る
- ☆定評のあるテキスト（p.71 参照）を選び、それを正確に覚えることが基本です。

③ お話を語る

お話で一番大事なものは、技術ではなく、お話そのものであり、それを伝えようとする語り手の気持ちです。お話のイメージが立ち上がるような語りを心がけ、演じるのではなく、自然に気持ちを込めて誠実に語ります。

◆どんな語りを目指したらよいか

- 気持ちがこもっていること
- 楽に聞けること
- お話が見えること
- 誠実で、素朴に、自然に語ること
- お話に合った語りを心がけること
- 目がしっかり聞き手に向けられていること
- お話を楽しむこと

◆声とことばについて

- 声は聞き手に届くこと、楽に聞ける発声、明瞭な発音を心がけます。
- ゆっくりと語ること（速さと間の取り方）

<参考>ストーリーテリングのおはなし会（平成22年度現在）

お話を学ぶには、たくさんのお話を聞くことが大切です。

大分県立図書館では、「小学生のためのおはなし会」（毎月第3土曜日）、
「大人のためのおはなし会（年4回）」を実施しています。

（※詳しい日時は年度によって変更するためお問い合わせください。）



(4) ストーリーテリング (お話) についてのブックリスト

① お話を語るために

- ・『お話を語る』松岡享子／著 日本エディタースクール出版部 1994
 - ・『お話を子どもに』松岡享子／著 日本エディタースクール出版部 1994
 - ・『たのしいお話1～9』(※2～6巻は上記2冊に収録されています)
 - 1 『お話のリスト〔第三版〕』松岡享子 東京子ども図書館 1999
 - 2 『お話とは』松岡享子／著 東京子ども図書館 1974
 - 3 『選ぶこと』松岡享子／著 東京子ども図書館 1982
 - 4 『おぼえること』松岡享子／著 東京子ども図書館 1979
 - 5 『話すことⅠよい語り』松岡享子／著 東京子ども図書館 1991
 - 6 『話すことⅡお話の実際』松岡享子／著 東京子ども図書館 1973
 - 8 『質問に答えて』松岡享子／著 東京子ども図書館 1975
 - 9 『お話の本のリスト』東京子ども図書館／編 東京子ども図書館 1990
- ※7巻『絵本を読むこと』は絵本についてなので除く

② お話の本

- ・『おはなしのろうそく』(小冊子) 1～27 東京子ども図書館
- ・『子どもに聞かせる世界の民話』矢崎源九郎／編 1964
- ・『イギリスとアイルランドの昔話』石井桃子／編訳 福音館書店 1981
- ・『子どもに語るグリムの昔話1～6』佐々梨代子ほか／訳 こぐま社
- ・『子どもに語る日本の昔話1～3』稲田和子ほか／編 こぐま社
- ・『岩波おはなしの本』シリーズ(全11巻) 岩波書店
(1巻「カラスのだんなのおよめとり」2巻「トンボソのおひめさま」他)
- ・『日本昔話百選(改訂新版)』稲田浩二, 稲田和子／編著 三省堂 2003
- ・『日本の昔話1～5』小澤俊夫／再話 福音館書店

《参考文献》『たのしいお話1～6、8、9』松岡享子著 東京子ども図書館

紙芝居

(1) 紙芝居とは

物語にそって描かれた絵を、演じ手が一枚ずつ引き抜きながら読む日本固有のもので、1930年ごろ、東京の下町に「街頭紙芝居」として誕生した紙芝居は、現在、世界に広がっています。

紙芝居は、表に絵、裏に文が書かれた何枚かの紙でできています。

それを舞台（枠）に入れ、観客に向かって文を読みながら、一枚一枚順番に抜いてお話を進めます。

(2) 紙芝居の魅力

紙芝居では、演じ手と観客が向かい合い、心をつなげて一緒に作品世界を楽しみます。

紙芝居は、静かにお行儀よく黙って見なければならぬものではありません。自由に声を出したり、画面に見入ったり、みんなの存在を感じながら楽しむものです。集団の中に身をおいて、一緒に紙芝居の世界を「共有」することができるのが、大きな魅力です。

また、紙芝居は複数で楽しむことを前提として作られているため、絵も遠目がきき、大きな会場や大人数でも楽しむことができます。

(3) 紙芝居の道具

紙芝居の舞台などの道具を使うと、紙芝居の形式が活かされ、その魅力を引き出すことができます。紙芝居舞台は市販されていますが、実演用に貸出をしている公共図書館もあります。（※県立図書館では特別貸出を行っています。）

- 紙芝居舞台（紙芝居を入れて演じます。木製で三面開きがよい）
- 紙芝居台（紙芝居舞台を置く台。市販品もありますが、机や箱を重ねて代用する場合は、台を黒い布などで隠すと効果的です。）

(4) 紙芝居の演じ方

- ・演じ手は、舞台の横に立って演じます。
- ・演じ手は、作品の指示に従って、丁寧に心を込めて紙芝居を抜き、差し込みます。この間が、作品世界を広げ、観客の強い集中を生みます。

- ① 準備
 - ・ 作品を選んだら、作品のテーマや世界を表現できるよう、演じる前に下読みして練習する。
- ② はじまり
 - ・ 演じ手は舞台の横に立ち、観客と向かい合って立つ。
(以後、内容を演じるときも、演じ手は常にこの状態)
 - ・ 演じる紙芝居を舞台に入れる。
 - ・ 舞台の扉を三面、奥側から順にゆっくり開く。
 - ・ 作者名とタイトルを読む。
- ③ 内容を演じる

注意点

 - × 舞台の後ろに隠れない。
 - × 声色（こわいろ）は使わない。
 - × 作品を改変して演じない。
 - × 作品世界を離れたパフォーマンスはしない。
- ④ おわり
 - ・ 「おしまい」等の終わりを表すことばを言う。
 - ・ 紙芝居は、初めの場面に戻さず、そのまま、三面開きの扉を、手前から順にゆっくり閉じる。

《参考文献》

『紙しばいだいすき』（無償配布冊子）童心社 1998

『紙芝居の演じ方Q&A』まついのりこ著 童心社 2006

童心社ホームページ「みんなでいっしょに楽しめるかみしばい」

<http://www.doshinsha.co.jp/kamishibai/index.html>

☆童心社の紙芝居サイト。

年齢別やテーマ別の紙芝居リスト、自社の出版目録もあり、作品選びの参考になります。
演じ方のQ&Aや動画もあります。



パネルシアター

(1) パネルシアターとは

Pペーパー※（テープも糊もついていないのに布に貼り付く紙）を貼り付ける大きな布を“パネル布”といいます。その“パネル布”を木枠に貼った舞台に、Pペーパーに描いた絵を貼ったり外したりして展開するパネル芝居を、「パネルシアター」といいます。内容は、お話に限らず、歌遊びやゲームなどにも用いられます。

保育・教育現場を中心に実演が広まり、お話会のお楽しみ出し物として用いられることもあります。

※ Pペーパーは、パネルシアターの専用紙で、インターネット通販などで購入できます。（「Pペーパー」で検索してください。）

特殊紙なので、文具屋などでは取り扱いがない場合もあります。



(2) パネルシアターの種類

● パネルシアター

白のパネルを舞台にして行う通常のパネルシアター。明るい部屋で演じます。

● ブラックパネルシアター

黒のパネルを舞台にして、部屋を暗くして演じます。ブラックライトを当てることで、蛍光インクで描かれた絵が浮かび上がります。

(3) パネルシアターの道具

- ・ パネルシアターには、パネルボード（舞台）やパネルを立てるイーゼルが必要です。
- ・ ブラックパネルシアターの場合は、イーゼルの他にブラックライトや黒のパネルボードを使用し、また、服や手が暗闇で目立たないようにするために、黒色の洋服や黒い指ぬき長手袋等を使うようにしましょう。

- ・これらの道具は、図書館用品やパネルシアターの取り扱いのある会社等で購入することができます。
- ・道具一式（パネルボードとイーゼル）やブラックライトを貸出している公共図書館もあります。（※県立図書館でも特別貸出しています。詳細は県立図書館・児童サービス担当へご連絡ください。）

(4) パネルシアター作品の作り方

切り取って組み立てるだけの市販作品が販売されていますが、型紙が載っているパネルシアター作成用の本（著作権許諾済み）が発行されていますので、それらを参考に自分で作成することもできます。

◆著作権への配慮

パネルシアター作成用の本ではない絵本などから複製して作る場合は、著作権者への許諾が必要になりますので、注意してください。

(pp.53・54 参照)

☆ 作り方 ☆

- ・ Pペーパーに下絵を写します。

絵の輪郭は油性ペンで、色はポスターカラーなどで塗り、輪郭をはさみで切り取ります。

- ・ 部品によっては、ジョイント部分が動くように縫いつけたりします。

(5) 演じ方

- ・ お話（または歌や詩などテキストとするもの）を覚えます。
- ・ 演じ手はパネルの横に立ち、聞き手と向かい合って演じます。
- ・ スムーズに演じることができるよう、貼り付ける部品等を順番にそろえておきます。
- ・ 演目によっては、歌や楽器などを用いることもあります。

(6) 保存

貼り付け部品等は、折れたり曲がったりするとパネルに張り付かなくなるので、平らにして、大きな封筒などの保存袋に入れて保管します。

読書へのアニメーション

(1) 読書へのアニメーションとは

『読書へのアニメーション』は、ゲームや遊びを通して読書に親しみ、楽しみながら読解力・表現力・コミュニケーション力を伸ばす読書指導の方法で、スペインのモンセラ・サルトが開発・体系化しました。

(参考：NPO日本アニメーション協会HP <http://animacion.jp/>)

(2) 読書のアニメーションの原則

- ・原則は本をまるごと1冊扱うこと（お話の途中で切らない。）
- ・必ず本に立ち返ること（単なるクイズに終わらない。）
- ・本の紹介を必ず入れること（もっと読みたいという気持ちにさせること。関連本や同じ著者の本も紹介すると良い。）
- ・児童生徒の興味に合わせて活動を組み立て、児童生徒の集中力が途切れたと判断したら中断すること

(3) アニメーションの選書

- ・アニメーションに用いる本は、学校図書館にある本を選びましょう。
- ・活動時間が限られているので、読むのに時間がかかるお話ではなく、短くても味わい深いお話を選びましょう。
- ・原則は、本をまるごと1冊扱うことですが、短編集の一編を扱う場合は、必ず本の現物を見せて1冊の本であることを示します。
- ・選んだ本は、活動のその場で読み聞かせをするのが一般的ですが、期日までに読ませておいて、当日を迎える方法もあります。

(4) アニメーター（指導者）

- ・アニメーションには、児童生徒と一緒に活動し、児童生徒をリードしていく指導者（アニメーター）が必要です。
- ・教えるという立場から離れて、遊ぶ感覚で、楽しい雰囲気になります。

(5) 読書ゲームの技法例

① 本の内容を理解する

例)「ダウトをさがせ」(わざと間違えたテキストを読み、間違えた箇所を発見したら、児童生徒に「ダウト」と言わせる。)

「物語バラバラ事件」(バラバラになったお話の断片や場面の絵を書いたカードを、児童生徒に順番通りに並べ直させる。)

② 登場人物になって考える

例)「この人いたかな」(登場人物のリストを見せ、児童生徒に登場した人物を当てさせる。)

「これ、だれのもの」、「これ、だれのことば」

(お話中の誰の持ち物か、誰の言葉か、児童生徒に当てさせる。)

③ 感想を交流する

例)「クイズでバトル」(物語の内容について児童生徒に問題を考えさせ、答えを出し合う。)

「ぼくもわたしも探偵作家」(お話の続きを児童生徒に考えさせ、発表し合う。)

役に立つこの1冊!

- ・『読書へのアニメーション 75の作戦』 M. M. サルト／著
宇野和美／訳 柏書房 2001
(同著者『読書で遊ぼうアニメーション』1997年の事例を増やしたもの)
- ・『子どもが必ず本好きになる 16の方法・実践アニメーション』
有元秀文／著 合同出版 2006

《参考文献》

『やってみよう 読書のアニメーション』(学校校図書館入門シリーズ7)

渡辺康夫著 財団法人学校図書館協議会 2000

『子どもが必ず本好きになる 16の方法・実践アニメーション』有元秀文著 合同出版 2006



その他の方法

○ペープサート

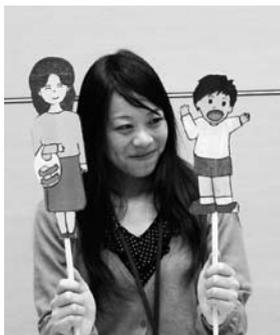
ペープサートとは、登場人物の絵などを描いた紙に棒をつけたものを、背景の前で動かして演じる人形劇のことをいいます。目先を変えて、本を児童生徒にアピールするのによい方法です。

ペープサート化する作品の選び方としては、繰り返しのあるもの、場面転換のはっきりしたもの等動きがあるものがよいでしょう。演じ方の留意点として、せりふ等の言葉は原則として覚えること（裏に書いておいてもよい）、絵人形は演じる順番に並べておくことが挙げられます。

○エプロンシアター

エプロンシアターとは、エプロンを使ってお話を演じる劇のことです。話し手が、胸にかけたエプロンのポケットの中から登場人物の動物や食べ物などを登場させて、エプロンの上でお話を進行させます。

マジックテープなどで固定する仕掛けになっており、大きな準備が必要なく、気軽にお話を子どもたちに届けることができます。演じ方の留意点として、演じ手の体が舞台ですので、体全体をうまく使って臨場感を出すように演じるとよいでしょう。



ペープサート



エプロンシアター

《参考文献》

『エプロンシアター イメージを豊かにする』（遊びが育つイラスト保育実技シリーズ）

中谷真弓著 フレーベル館 1989

『実技講座 パネルシアター楽しもう』 月下和恵著 アイ企画 2009